

また、水不足も深刻な課題の一つだ。そもそも水源が少ないヨルダン。日本と違って蛇口をひねれば24時間水が出るわけではない。

**生活に欠かせない水を
全ての人へ**

「安い給料で長時間働くシリア人に仕事を取られた」
そんな不満が上がり始めたのだ。この現状を改善すべく、国際社会がホストコミュニティを支援するためにさまざまな支援を展開。日本は学校や病院への資機材の供与に加え、青年海外協力隊員による難民の子どもたちのこころのケアなどを進めてきた。

人口の増加でさらに負担がかかっている老朽化した送水管や配水管の更新、水を送るポンプの改修などを優先的に行う他、今後どう上下水道のサービスを維持していくか、水かんがい省や北部4県を管轄するヤルムーク水道公社と共に、3年間の中期計画をつくっていく。さらに、漏水探知・修繕や

「そこで、日本の高い技術に、ヨルダン、そして国際社会から期待が高まっています」と平田さん。約30年にわたり、ヨルダンで分野のインフラ整備や人づくりを支援してきた日本。これまでの経験と技術を生かし、より多くの人に効率的に水を届けられるよう協力を始めている。

て暮らしているのだ。
こうした難民を受け入れている地域が、ホストコミュニティだ。その多くがイルビッドをはじめとする北部地域とされるが、どこにどれだけの難民が暮らしているのか、正確には分かっていない。「ヨルダンを含むアラブの国には、みんな兄弟として助け合う精神があります。ヨルダンの人々もシリアの人々を受け入れたいと思っていますが、このホストコミュニティで問題が起き始めています」と、JICAヨルダン事務所

の平田知美さんは話す。
「シリア難民がたくさん入ってきたことで住居の需要が増え、自分の家賃まで上がってしまった」
北部地域では、以前は1週間に1回、12時間給水され、1週間分を大きなタンクにためて節約しながら使っていた。
ただでさえ、そんな厳しい状況だったところに、シリア難民の増加で需要が増え、さらに水不足に陥ってしまった。現在、給水は2週間に1回。給水車を呼ぶことはできるが、水道水よりも高くつき、日々の暮らしに精いっぱいの人々にとっても払えない。また、学校でもシリア難民の子どもが通うようになって生徒数が増え、水不足のためトイレの水を流せないなど、衛生面でも問題が引き起こされている。

「そこで、日本の高い技術に、ヨルダン、そして国際社会から期待が高まっています」と平田さん。約30年にわたり、ヨルダンで分野のインフラ整備や人づくりを支援してきた日本。これまでの経験と技術を生かし、より多くの人に効率的に水を届けられるよう協力を始めている。



from JORDAN
ヨルダン

ヨルダン北部のザータリ難民キャンプで暮らすシリア難民の子どもたち

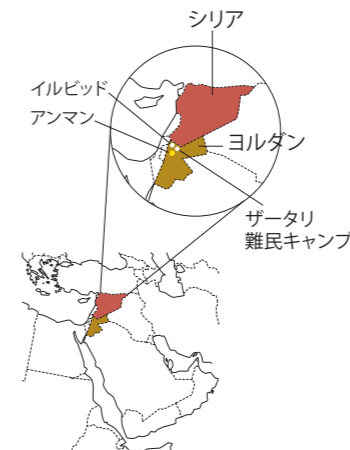
**生まれ始めた
あつれき**

「この街には、シリアからの難民が何千人もいるよ」
ヨルダン北部の街イルビッドで、そんな話を聞いて驚いた。2011年から続くシリア内戦が激化し、隣国のヨルダンに逃れてきた難民は約58万人といわれている。

そこで、シリアとの国境近くのヨルダン北部に設置されたのが、ザータリ難民キャンプ。国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）を中心に、各国政府やNGOから、住居や食料、保健医療サービスなどが提供されている。だが、このキャンプにいては約12万人。全体の2割に過ぎない。現金収入を得られず、配給のみの生活に耐えかねてキャンプを出た人々も多く、残りの8割は街中に家を借り

**みんなが笑顔になれる
暮らしを求めて**

内戦が続くシリアから難民を受け入れているヨルダン。ヨルダンとシリアの人々が安心して生活できる国になるよう、日本ならではの支援が始まっている。



イルビッドで出会ったシリア難民の男性(右)は、「家族15人で一つの家に住んでいる」と現状を話した



ザータリ難民キャンプではテントやプレハブが増え、街のように拡大が続いている



課題を知るために北部地域を視察する平田さん(中央)。本来なら地中にあるべき配水管がむき出しになっている



国際NGOのSave the Childrenで活動する青年海外協力隊員。手遊びを通してヨルダンで暮らすシリア難民の子どもたちのストレスを和らげる(撮影：久保田弘信)